

年頭の辞

新年のご挨拶



一般社団法人 軽金属学会
会長 平野 清一

明けましておめでとうございます。本年も会員の皆様のますますのご健勝とご発展をお祈り申し上げます。

2020年頃から世界を大きく変えるきっかけとなった新型コロナウイルスは、3年経過してようやく終息に向かいつつあり、日常生活が復活しました。円安が継続し、海外からの旅行者も多くなりました。一方、世界の平和が遠い存在のままであることが残念であります。昨夏は日本では今までにないほどの高温を示す地域が増え、世界で異常気象が頻発しました。グテーレス国連事務総長から「地球温暖化から地球沸騰化へ」と発言があり、地球温暖化対策が待ったなしの状態であることが世界の共通認識になりました。

モビリティ産業ではCO₂削減の観点で電動化が主流になりつつあり、EV (Electric Vehicle) の普及も進むことが世の中の流れとなりつつあります。EVでは電池の性能向上はもちろんのこと、車体軽量化とコスト低減が必要でギガキャスト (大型アルミダイカスト部品) の採用が増える可能性も出てきました。このような状況下で、アルミニウムをはじめとする軽金属の果たす役割はますます増えるものと思います。

会長就任挨拶では、変化する状況のなかでよりいっそうのコミュニケーションの活性化を図り、基盤技術の深掘りについて本学会を利用して推進していきたいと述べました。昨年を振り返りつつ、今年も新しい状況変化に配慮した活動に取り組みます。学会活動も、マンネリ化している活動・手続きがあれば合理化し、次の世代につなぎたいと思います。例えば、書類の印は全廃へ、会議なども回数ではなく内容重視で議論に時間を割いていきたいと思います。こうした改善は常に進めなければなりません。提案は歓迎です。

第144回春期大会 (香川大学)、第145回秋期大会 (東京都立大学) とともにハイブリッド開催となり、ハイブリッド方式開催の敷居が下がりました。参加者を増やすためには良い判断だと思います。春期大会では講演会517名、懇親会243名、秋期大会では546名、懇親会270名と多くの方々に参加いただきました。現地開催のみとしたポスターセッション、懇親会では世代をまたいで対面で会話する有効性を改めて認識できました。

研究部会の活性化として、先行研究部会が新設され、生産技術テーマを含む9部会が活動し、運営方法は研究委員会で検討されています。

国際交流を目的に、タイでThailand Institute of Scientific and Technological Research (TISTR) - 軽金属学会 (JILM) 共催のアルミニウムに関するセミナーを昨年9月6日から8日に開催、115名参加で、生産技術に関する講演が特に盛況でした。タイには日系企業の進出が多く、継続的なセミナー開催が望まれています。また、第145回秋期大会中にALMA (Asian Light Metals Association) Forum 2023を開催しました。オーストラリア、韓国、中国、台湾、日本から2名ずつの講演をお願いし、軽金属に関する話題を共有できました。

男女共同参画委員会では、多様な人材が共に活躍できる社会を目指し、性別やその他の違いを相互に尊重し合いながら軽金属分野における研究や技術に関する活動の活性化を図る取組みをしています。春秋講演大会でも男女共同参画セッションを設け、さまざまな視点をおもちの方やダイバーシティの取組みを推進されている方に登壇いただいています。若手のキャリア形成に注目し、学生を含む30歳以下の若手人材に近年のキャリアに関する悩みや不安を共有いただくセッションも開催されました。次世代への啓蒙活動から軽金属分野の発展を図る活動がなされ、支部活動でも同様な活動が行われています。

最近Hans Rosling著の『Factfulness』を原書で読みました。データを正しく理解することの重要性が述べられています。このことは我々にも通じることで、正しいデータを取り理解し深く考察し、これをベースに議論していくことが重要だと思います。

今年は、6月にアルミニウム合金国際会議 ICAA19 (The 19th International Conference on Aluminum Alloys) がUSAのAtlantaで開催の予定もあります。

今後とも、ベテランの方々の知見を活かしながら、研究活動をレベルアップし、次世代を担う若手研究者・技術者が継続して元気が出る学会にしたいと思います。会員皆様のご協力をお願い申し上げ、新年の挨拶とさせていただきます。